

■■■■小学校5年■■■■さん（平成11年■■月■■日生、11歳）の心理調査結果の概要
平成22年12月11日

長野県家庭裁判所松本支部御中

ふりはた子どもの輝き相談所長
前清泉女学院大学教授
臨床心理士 降旗志郎

I 心理検査実施日・場所

平成22年9月21日、12月4日、12月5日に安曇野市穂高牧252、ふりはた子どもの輝き相談所で実施した。

II 知能検査結果

1. 12月5日に WISC-III を実施した。

2. 言語性 IQ118、動作性 IQ117、全 IQ118 であって「中の上」段階である。言語能力全般が強く、語彙力が豊富であり、常識があり社会的理解力が強い。証言能力、文章力は十分にある。

III 性格検査結果

1. 12月4日に TEG（東大式エゴグラム）、小学生 SCT（文章完成法テスト）、描画テストを行った。描画テストは9月21日との2度実施した。

2. 本来の性格

- (1) 本児は本来何事も中庸で適応タイプでパーソナリティが安定しており、無理なく生活していくことが性に合っている。行儀よく丁寧である。
- (2) 外界に対する感情、観察能力がある。自分の能力を表示し、自分のできることを見せる。目前のはっきりした成功によって行動を決める。他人を助けたいという欲求によって動機づけられる。先んじては物事を考えることができない。楽天主義的な傾向がある。

3. 現状についての認識

今の家では皆がやさしくしてくれること、虐待について本児の書いた文章によるが母親の子育てが虐待があったり不適切であり、母親が嫌いで、母親がまともになったとしても一緒に住みたくないこと、もっと早く父親と住まなかったことを後悔している。母親の所でなく父親の所で暮らせるように決着がつくことが一番大きなことで、他のことは客観的論理的に考えられなくなっている。

4. 父親、母親に対する受け止め方

- (1) 父親を、完成・計画性・独立の人と感じており、尊敬し父親からの愛情を嬉しく思っている。
- (2) 母親を、自己愛が強く、外界への敵意を持っていること、母親が本児や父親のことを全く否定しているため、本児は母親の言うことを拒否しており、母親からの危険に対し、強い恐れと敵意を持ち、猜疑心を持ち、反抗的であるサインがある。

5. 9月12日と12月4日の間の変化

(1) 9月21日

- ① 主観的内向的でちょっとしたことを気にし、感じ易く敏感で反応し易く尻込みし、慎重で、外界への防衛的態度が強く自分から容易に抜け出せない。
- ② 批判的で怒りっぽく、拒否、反抗、無視する。
- ③ 自己主張や意志の強さを示そうとしており、言葉で他人を攻撃しようとする衝動が強いにもかかわらず、妨げられることを恐れて引きこもりがちになっていたりと、自分が他の人（母親と思われる）から拒否されていると感じている。
- ④ 感情機能が十分発達しないので表面的な感じ方をし、自分本位で共感性に欠けている。

(2) 12月4日

- ① 感情や衝動を理性や知的に統制できるようになってきている。
- ② 人間関係に順応でき、自分の環境内における人や物事を、統制したり変化させようとする働きができるようになってきている。
- ③ 自分の弱さを補償して力強くあろうとしている。また、外界の物事を操作することに関心を持ってきている。
- ④ 精神面では、外界を観察する能力、快活、弾力、元気な、成功をあてにする、陽気な感じが出てきている。
- ⑤ 勇敢に行動することへの抑制された衝動が開放され、経験への衝動、自信、完成欲、自己顕示、自己拡大、過活動、高揚した気分、攻撃性が出てきている。これは父親の家で温かく、人格対人格として自分を認めてもらえて、明るい雰囲気の中で、心地良く暮らしている体験と、母親の不適切さを批判し、父親を尊敬し今の愛情があり温かな家から離れたくない決意を1時間半かかって文章化した勢いの深層心理的变化を表わしている。

6. 9月21日から12月4日までの変化で言えること。

- (1) この期間における本児の精神面の発達には著しく、身体的にも第2次性徴のきざしが見えてきており、現在の父親の家での生活がかけがえのないものとなってきている。
- (2) 小学4年生の時からあり9月21日にもあった円形脱毛症が12月4日には消えて

いる。父親の家で愛情豊かに人格対人格として受け入れられながら、登校や家の手伝いをして落ち着いた生活ができていることにより過剰なストレスが消えていること、精神面・身体面がのびやかに成長してきていることが明らかである。

7. 判決が本児の希望するものでなかった場合に考えられること

- (1) 精神的エネルギーの流れの方向が急激に変化し、自己主張の強い意志を示したり、頑固、分裂気質を示すサインがあり、悪化すれば統合失調症の初期段階に向かっていくことを暗示するサインが随所にある。パーソナリティの崩壊（統合失調症の初期）を食い止めようとするサインもある。
- (2) または、社会規範から逸脱して窃盗をしたり、さもないければ攻撃しようとする衝動が妨げられることをおそれて引きこもるサインがある。

■■■■さん心理調査結果

平成22年12月11日

長野家庭裁判所松本支部御中

ふりはた子どもの輝き相談所長

前清泉女学院大学教授

臨床心理士 降旗志郎



I 所見作成者連絡先

〒399-8305

長野県安曇野市穂高牧252

ふりはた子どもの輝き相談所

降旗志郎

Tel 0263 (83) 2745

Fax 0263 (83) 4161

II 対象児

長野県■■■■

■■■■小学校5年

■■■■ (平成11年■■月■■日生、11歳)

III 知能検査結果

1. 知能検査名: WISC-III

2. 検査実施日: 平成22年12月5日 PM4:37~6:45 (途中10分間休憩)

3. 検査場所: ふりはた子どもの輝き相談所

4. 検査者: 同相談所所長 臨床心理士 降旗志郎

5. 結果 (別添1)

(1) 概要

言語性IQ 118

動作性IQ 117

全検査IQ 118

(2) 群指数

言語理解力 (言語能力) 群指数 120

知覚統合力 (非言語能力) 群指数 124

注意記憶力 (聴覚的短期記憶力) 群指数 115

処理速度 (視覚的短期記憶能力) 群指数 94

6. WISC-IIIからみた強い能力

(1) 記号とその意味との結びつきを憶える能力である学習能力が強い。

(2) 事実、思考内容、概念などを言語によって理解・表現する能力である言語概念化であり、言語能力全般が強い。

- (3) 語彙力豊富に答える力である長い言語反応が強い。
- (4) 全体状況を見渡して、行動の方針を立てる能力である計画能力が強い。
- (5) 視覚で全体をとらえ、把握する力が強い。
- (6) 常識であり、原因と影響を考える力が強い。
- (7) 理解力が強い。

7. WISC-Ⅲから見た弱い能力

- (1) 平均的で「中」ではあるが、本児としては知識を習得する力が弱い。
- (2) 平均的で「中」ではあるが、本児としては長期記憶が弱い。
- (3) 平均的で「中」ではあるが、本児としては知識を蓄える力が弱い。
- (4) 視覚で記憶する力が弱い。
- (5) 集中する力が弱い。
- (6) 固執性がある。
- (7) 平均的で「中」ではあるが、本児としては、環境への敏捷性が弱い。SCTでは、「私の失敗はもつとはやく父さんと住まなかったことです」と書いてる。
- (8) 興味を持つ力が弱い。
- (9) 課外読書が少なかった。
- (10) 初期環境が豊かでなかった。
- (11) 知的好奇心が強くなく、努力をしてこなかった。
- (12) 平均的で「中」ではあるが、本児としては学校での学習をしてこなかった。

Ⅲ 性格検査結果

1. 東大式エゴグラム (TEG) 12月4日実施

(1) TEG (東大式エゴグラム) とは

交流分析理論に基づいた心理テスト、1984年に出版されてから、医学、心理学、教育、産業界など種々の分野で広く使われてきている。エゴとは心理学でいう「自我」のことであるが、その「自我」の状態を一目でわかるようにグラフ化したもの。

(2) 本児のエゴグラム結果 (別添2)

何事も中庸で適応タイプ。温厚。無理なく生活していることが性にあっている。

(3) 備考 (別添3)

質問項目50項目中42番目の項目は、「わたしはこまっている人のためになぐさめてやる。」であるが、本児はこの質問項目を「わたしは、こまっているひとのためになぐさめてあげれる。」と書き改めて「ときどき」と回答している。これは本児が他者の存在(人権)を尊重し、自分が献身することができる、そういう自分であることを覚知していることを示すものである、と言える。

2. 小学生用 SCT (文章完成法テスト) 12月4日実施

(1) SCT とは

投影法の1つで、いろいろ書きかけの文が並んでおり、それを見て頭に浮かんできたことを続けて書いていくものである。無意識に抑圧しているものや葛藤・欲求などを知る手掛かりを得ることができる。

(2) 本児の SCT (別添4)

- ① 本児は父親が自分を大切にしてくれ、今の家庭では皆がやさしくしてくれること、虐待については本児が書いた文章によるが、母親の子育てが虐待があったり不適切であり、母親が嫌で、母親がまともになったとしても一緒に住みたくないこと、もっと早く父親と住まなかったことを後悔していることを書いている。
- ② 他に 41 項目あるが、時間が十分にあったにもかかわらず、書いていない。これは、本児が母親の所ではなく、父親の所で暮らせるように決着がつくことが一番大きな課題であることを示すものであり、他のことは考えられないほど、それが強いことを示している。そしてまた、客観的・論理的に考えられなくしている。
- ③ Part①の左下の空白部に手の平の大きな人物像の落書きがある。これは今の自分なら人との対人関係を操作していくことができる、という自分の力を示している自己像と思われる。
- ④ 同じ人物像で足の指を描いているが、これは現在の不安定な状態が、父親の下で暮らすという決着が早くつかないと、社会規範から逸脱して窃盗をしたり、悪化すれば統合失調症になるおそれがあることを示すサインである。

3. 描画テスト (HTPテスト) 9月21日と12月4日の2度実施

(1) HTPテストとは

教育や心理臨床の場において、なんらかの目的をもって被験者に鉛筆やクレヨンなどを与え、紙上に何かを表現させる心理テストが描画テストである。パーソナリティを診断したり、心理療法の補助手段として用いられる。家庭 (House)・樹木 (Tree)・人物 (Person) の描画が豊かな象徴性をもっており、被験者のパーソナリティの様々な局面を、無意識のうちに表すとされている。

(2) 9月21日と12月4日と2度 HTPを行った理由

父親から9月21日に、本児が円形脱毛症が小学3年、小学4年の時に大きかったと写真を見せられ、今も大きいと説明を受けた。そして、12月4日に父親から円形脱毛症が完治した、と説明を受けた。円形脱毛症は心身症の1つであり、ストレスが影響しているところから、この2カ月13日間にどのようなパーソナリティの変化があったのかを観るために、2度目の HTP テストを実施した。

以下、H. T. P. の各々について解釈しながら、前後の変化を分析してゆく。

(3) 家屋画 (H)

① 家屋画とは

被験者が成長してきた家庭状況を表わし、自分の家庭状況や家族関係をどの様に認知し、それに対しどのような感情をもち、どのような態度を有しているかを示す。

② 両日の家屋画 (別添5, 6)

ア. 1回目では筆圧が強く、著しく濃い線により、また家全面斜線で模様付けする、また白い壁と字でしるしているにもかかわらず斜線で模様付けするなど外界との境界を強調しており、パーソナリティの崩壊（統合失調症の初期）を食い止めようと試みている。

2回目では透明の壁を書き、自己の内界と外界との境界があいまいになってはいるが、家の中に電気が6個ついてテーブルを2つの椅子で向かい合い、対人的に人権を大事にし合った明るい家庭であることを、できるだけ細かく描こうとしている傾向が見える。

イ. 家を大きく描き、家庭を温かい存在と感じている。自分自身を他人と協調していく性格であると眺めている。1回目より2回目の方がその傾向が強い。

ウ. 1回目、2回目とも壁を一面だけしか描かず、他人に対し（特に母親に対し）猜疑心を持ち、反抗的である。

エ. 1回目は壁を強調し、自分の平衡やパーソナリティの統制を維持しようと意識的に努力している。これに負荷がかかり失敗すると精神病の初期へと移行する恐れがある。

オ. 1回目の鍵のついた窓は、外界（母親と思われる）からの危険に対し、強い恐れと敵意を持つことを表わしている。2回目にはそれが消えている。

カ. 1回目、2回目とも、とびらが家の側面にあり、逃避傾向があり、慎重さ、表面的な受動性を示している。

キ. 2回目では壁を通して部屋の内部の様子が描かれている。これは現実吟味力が不完全であり、母親の家よりも父親の家の方が温かく明るくて良い、という自分の形成した概念を論理的・客観的に表現する能力を欠き、その良さ・尊さを十分にことばで説明できないことを示している。

ク. 2回目では、木と太陽を描いているが、これは父親を象徴している。本児が不安感をもつがそれを解消し、自分の安全性を維持しており、それが父親がそばにいてくれることによって出来ていることを表わしている。

ケ. 1回目ではライトが外壁と家の玄関に向かう入り口についている。これは、本児が「この家は幸せになれる家である」と思っている段階だと言える。2回目では家の中に6個のライトがついており、その家で幸せを十分受けている状態にいる。

コ. 1回目では、テーブルに椅子1脚であり、食事に代表される家の中での飲びは自分が1人で感じるものであったが、2回目ではテーブルに椅子が2脚であって、この家で家族と自分が一人の人間として人格対人格として大切にされ、尊重されていると感じていることを示している。

サ. 1回目、2回目とも基線を薄く描き、不安が強くなり、依存的になっていなく、自主性に欠けていない様になろうとしているが、一部基線がなく、そうなりきれていない。特に2回目では、家へ入るアプローチに基線がない。用紙の端からはみ出している。これは、家へは、ポストがあって自分の所在（住所）も明らかになったが、まだこの家へ入れるかどうか決定的になっていないことに対する不安が強く、この点については依存的にならざるをえなく、自主的に慣れていないことを示している。

(4) 樹木画 (B)

① 樹木画とは

白紙を渡し「外を見ないで心の中に1本の実のなる樹を思い浮かべてそれを描いてください。実はないでもいい、なくても結構です」と教示して描いてもらう。

樹木はその非人間的な形のために、被験者が樹木を描く時は、人物を描く場合よりも被験者の防衛が少なく、自己像をより直接的に表すと考えられる。樹木を描くにあたって被験者は、これまでに見た多くの木のうちで、自分が最も共感して同一化したものを選び、それを自分自身の内的感情によって変容させていく。したがって、樹木画は被験者の基本的な自己像を表わし、被験者が自分自身の姿としてほとんど無意識に感じているものを示している。それはまた、被験者が自分の心の平衡状態についてどう感じているかを示し、被験者の精神・性的成熟度（パーソナリティの発達）の程度を表わしている。

② 両日の樹木画（別添7，8）

ア. 1回目は2回目比べて下方に描かれているが、1回目の時はまだ未来への展望を持たず想像力が乏しく、实际的で現実的なことを重視し、安定を求め、不適切感から受動的になりやすい状態にあったと言える。

イ. 2回目の木のサイズは1回目よりも大きく、著しく大きい。これは、自己顕示、自己拡張、過活動、高揚した気分、攻撃性を示している。これは母親の不適切さを批判し、父親を尊敬し、今の家庭は愛情があって温かく、この家から離れたくない決意を1時間半かかって文章化した勢いの深層心理面であると言える。

ウ. 2回目の木は用紙の左、右、下の三方で切断されているが、あらゆる方面からの影響を受けやすく、被影響性が強かったり、高揚した気分であったり、空想が実現されると思い自分の空想の中に生活しがちであることを示している。

エ. 木のラインは情緒を表わすが、1回目2回目とも丸みのある曲線のラインで描いている。これは本児が生来健康で適応していける人であることを示しているが、ともすると依存性や時には慣習を無視する傾向があることを示している。

オ. 2回目は2枚ではあるが葉が描けている。外界を観察する能力、快活、弾力、元気な、成功をあてにする、陽気な感じが出て来ている。1回目は見られなかった。

カ. 1回目2回目とも実が描かれ、外界に対する感情、観察能力、日常生活におけるよりもテストの時の方がよい成績を示すことが多いが自分の能力を表示する、自分のできることを人に見せる、目前のはっきりした成功によって行動を決める、他人を助けたいという欲求で動機づけられる、先んじては物事を考えることができない、楽天主義な傾向がある。1回目より2回目の方が実を多く描き上述の傾向が強い。しかも2回目の右側は実が熟しており、上述の傾向が強い。なお、この右上の位置は空間図式でいえば完成・計画性・独立を表わし、本児にとって父親の位置でもある。

キ. 1回目2回目とも樹冠が小さくて幹が長い木であるが幼少期の子どもには普通に見られ、子どもが理性よりも情緒による生活を送り、性衝動が表に出ていないことを示している。

ク. 1回目の幹の幅は狭い。感情機能が十分発達しないで表面的な感じ方をし、自分本位で共感性に欠けていることを表わしている。2回目になると幹の幅が広い木になっており、自己を主張しようとし、自己本位な感傷性によって、理性よりも感情に支配され易い。

ケ. 2度目より1度目の方が樹皮の線が多い。これは1度目の時の方が、自分と環境との関係に不調和感を抱き、外界への防衛的態度が強いことの表れである。感じやすく敏感で反応しやすく、批判的で怒りっぽくいることを示している。

コ. 幹に目があり、勇敢に行動することへの抑制された衝動、気後れしないことへの抑制された衝動、自立的であることへの抑制された衝動がある。1回目は8個だが、2回目は1個と少なくなっている。これは母親を批判し、父親を尊敬し、父親と一緒に暮らすことを書いて宣言したことによって抑制されていた上記の衝動が開放された結果であると考えられる。

サ. 1回目2回目とも樹冠が横に広がっているが、外界からの過度の圧力に服従していた方が安全でいられる、と感じている。

シ. 1回目では下から出ている小枝に樹冠がまとわりついているが、これは意図を隠すサインであり、自分の考えをそのまま表出することを避け、状況に応じて用心深く現実と接触しているようにしている。2回目にはそれが消えている。

ス. 1回目は先の太くなった枝を描いているが、敵意、抑制の欠如、被影響性を表わしている。2回目ではそれが消えている。

セ. 2回目には、左側の小枝が角のある枝になっている。これは精神的エネルギーの流れの方向が急激に変化することを示し、自己主張や強い意志を示したり、頑固、分裂気質を表わしている。1回目にはない。これは今回の父親の下で暮らすか母親の所でか大きな課題について対応が本児の願っているものでなかった場合、本児は統合失調症の初期段階に向かっていくことを暗示するものと考えられる。

ソ. 1回目2回目とも基部が広い。これは本児が遅いけれども着実であることを示す。

タ. アーケード型の冠部が1回目2回目とも描かれている。行儀が良く、いんげんで丁寧であることを意味している。

チ. 1回目は樹木の左側が強調されている。これは主観的で内向性、拒否、反対、尻込み、慎重、ちょっとしたことを気にする、自分から容易に抜け出せないことを表わしている。2回目では、右側が強調されている。これは、経験への衝動、自信、完成欲、自己を顕示する、自己拡大を表わしている。母親との同居を否定し、尊敬し愛情深く温かい父親との家庭を選ぶ文章を書いた自信や父親の家で心地良く暮らしている体験が1回目と2回目に違いとなって表れていると思われる。

ツ. 木全体が1回目は左に傾斜している。これは防衛的態度、嫌悪、注意深く抑制された適応、マスク（仮面）、反抗、無視を意味している。2回目はまっすぐになっている。

(5) 人物画 (p)

① 人物画とは

家屋画と樹木画も、それぞれが被験者の自己像を表わしているが、人物画は、原則として自己の現実像か理想像を表わし、自分にとって意味ある人や、人間一般をどのように認知しているかを表わすと考えられている。

③ 両日の人物画（別添9、10、11、12）

1回目2回目とだけ書き、特に断りのない場合、男性像と女性像に違いが見られず男性

像と女性像の両方が一致していることを書いている。

ア. 1回目は男女とも人物画が小さい。これは本児が自分を小さく無意味な人間であると考えていたり、依存的な人間であると考えている。2回目は男女とも大きく描いている。

イ. 1回目2回目とも人物画の頭を大きく描いたり、強調しているが、これは児童が描きやすいので特別の解釈はしない。

ウ. 1回目では、横に一本の単線を引いて口を描いているが、自己主張や意志の強さを示そうとしており、言葉ばで他人を攻撃しようとする衝動が強いにもかかわらず、妨げられることを恐れて引きこもりがちになっていた、自分が他の人から拒否されていると感じていることを示している。2回目はそれが消えている。

エ. 1回目は頭髮に濃い陰影をつけたり、塗りつぶしているが、自分が考えていることや空想していることに対し不安を抱いていることを表わしている。2回目ではそうではなくなっている。

オ. 2回目の男性像では耳と目を強調して描いているが、過感性が強く、人と自分を強く関係づけて考える傾向が強い分裂性性格の人であることを示している。2回目の女性像では、ひとみのない輪郭だけの目を描いているが、自己愛が強く、外界への敵意を持っていたりして、外界との接触を求めず、自分の空想世界に入り込んで自発性を失っていることが多い。この女性像は母親でもあり、本児の母親に対する感情や態度であると思われる。また、2回目の女性像では耳がない。耳は受動的器官であり、本児が母親の言うことを拒否していることの表れであったり、母親が本児や父親の言うことを拒絶する姿勢であることを表わしていると思われる。カ. 1回目は男性像、女性像とも鼻が描けていない。2回目は男性像、女性像とも鼻を描いている。鼻は男根の象徴である。父親の家で愛情を豊かに受けながら生活につれ、精神面身体面がのびやかに成長し、第2次性徴が見られるようになってきていることを示している。

キ. 首は頭と胴を連結する部分であって頭という知的な領域や統制力の領域と、胴という感情的な領域や衝動の領域を結ぶ器官である。1回目は衝動を適切に統制することができないため、首を省略している。これは児童では普通である。2回目は首を描いており、感情や衝動を理性で知的に統制出来るようになってきている。ただ、頭と胴を全く切り離すように細くて長い首になっているが、成人でこのような首を描く人は、分裂性性格者や統合失調症者の人物画によく生じる。

ク. 腕と手は自我の発達と人間関係での順応性の発達に関係しており、自己を防衛したり、他人に働き掛けて強調したり、攻撃したりすることを象徴すると考えられている。腕は特に、被験者が自分の環境内における人や物事を、統制したり変化させようとする働きを表わしている。1回目より2回目の腕の方が人物の腕が胴から適度に離れ、柔らかみのあるものとなっている。これは2回目の方が人間関係に順応していることを表わしている。

ケ. 手も腕も同じく外界の物事を取り扱い、人間関係に適応するための器官である。児童は人物の手を大きく描く傾向がある。本児も1回目より2回目は、何倍も大きい手を描いている。しかも男性像では極端に大きい手を描き、消しゴムで消して小さくしているがそれでも大きい。女性像も手が大きい。これは自分の弱さを補償して力強くあろうとすることを示し、また外界の物事を操作することへの関心を表わしている。これは母親の愛情の無さと決別し、尊敬し愛

情深い父親およびその家族と暮らしたい文章を1時間半かかって書き、それが裁判に影響するかもしれないことを知っている現在の状況の体験によるものと思われる。

コ. 指は環境に直接接触し、それを操作する器官である。1回目より2回目が大きく、2回目はグローブのような手と指を描いているが、攻撃衝動を抑制しようとする意識的な努力を表わし、攻撃性をひそかに表わしがちである。1回目2回目とも指を1本ずつ注意深く分けて丁寧に描いているが、攻撃衝動を抑圧し、それを外部に表すことを恐れ、感情を伴った接触を避けて引きこもうとすることを表わしている。

サ. 1回目も2回目も胸を普通に描き、相応の基本的欲求と衝動を持っていることを示している。

シ. 1回目も2回目も脚と足を描き、パーソナリティの安定性が見られることを示している。これはエゴグラムで中庸で適応タイプとなったことと共通していると思われる。

ス. 衣服は自意識の強さ、社会的承認への欲求、自己保全の欲求を表わす。1回目も2回目も描いているが、2回目の方がより精密に描き、上記の傾向がより見られることを示している。

セ. 靴は女性らしさに関連し、女性性器を象徴すると考えられている。1回目は描かず2回目に描き、特に2回目の男性像では、靴を描くにあたり、靴の形や靴ひもなど細かいところまで描いており、女性への関心を表わしている。本児が父親の家で落ち着いた人間的温かさを享受しながら第2次性徴が始まっていることを示すものであるといえる。